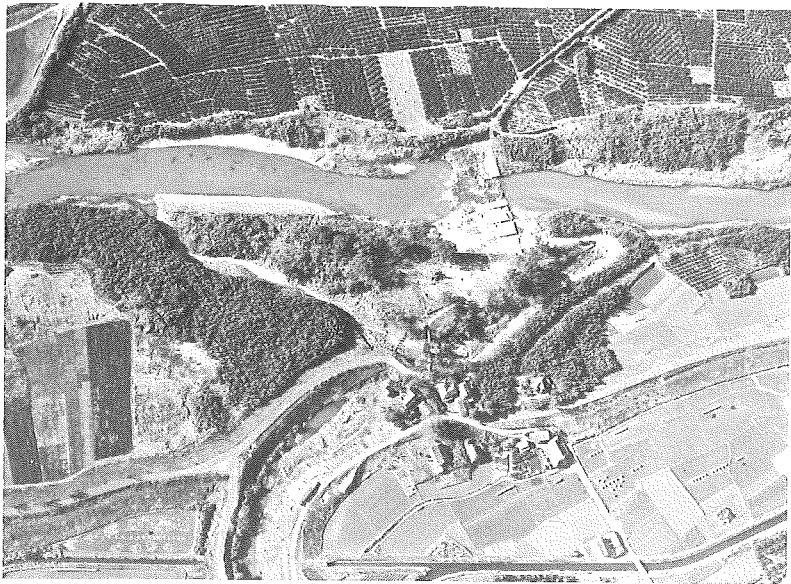


近 世



石井樋

概 観

近世とは、織田信長が室町幕府を倒した天正元年（一五七三）から徳川十五代将軍慶喜が大政を奉還した慶応三年（一八六七）までの約二百九十余年間であつて、安土桃山（織豊）時代と江戸時代の二つに分けられる。安土桃山時代は群雄割拠した戦国時代も織田信長によつて全国統一が進み、足利義昭を追放した天正元年（一五七三）から信長のあと、豊臣秀吉が天下統一を成しとげ、慶長三年（一五九八）病死するまでのおよそ二十五年間である。

この時代は関白太政大臣となつた秀吉が、産業、経済、宗教、外征等不滅の功績を残した時代であり、特に文化面では信長の安土城、秀吉の大坂城、伏見城、聚落第等の建設に見られるようなその豪壮優美さは、他に比を見ることができない画期的なものといふことができる。

江戸時代は秀吉の死後、徳川家康が慶長五年（一六〇〇）石田三成を関ヶ原の戦いで破り、慶長八年（一六〇三）征夷大將軍に任ぜられて江戸幕府を開いた時に始まり、慶応三年の大政奉還まで二百六十五年間である。この時代の特色は、旗本や御家人を直屬の家来とした強大な武力をもとに、主従関係を土台とする社会ができ上つた事であり、いわゆる封建制度が最も発達して政治・経済・社会・文化等の面でその本質を現わし、強大な経済力をもとに中央集権的な政治が二百六十年の長きにわたることとなつた。その特色の主たるものは次のとおりである。

- 1、幕藩体制といって徳川氏が十五代の間將軍職を独占して幕府政治を行い、諸大名は徳川幕府の支配下にあつて庶民を支配するという支配階級としての特別な権力を振う強力な政治体制をとつた。
- 2、士農工商の身分制度が明確で、武士は庶民の上に立つものとして名字帯刀という特権を持ち、庶民階級は農工商に分けられるという支配制度が確立された。
- 3、種々の産業が発達して、自給自足から貨幣流通経済へと進歩し、農業の外製粉、製油、製陶、製酒等の加工業も目覚ましい発達をとげた。
- 4、文化面では、政治が安定したので平和な生活が続くと共に、経済生活にもゆとりができて、学問芸術が一般庶民の間にも普及した。

こうした江戸時代の特色をもとに、当時の佐賀県の様子を見ると、九州地方はまだ統一されておらず、東に大友、西に龍造寺、南には島津等が割拠し、常に戦が繰返されていたが、秀吉の天下統一によって九州も治まり、諸将は領地を分配されることとなった。わが肥前の国は大部分が龍造寺領となり、後には佐賀藩、唐津藩、幕府領、田代領（対島藩）の四藩となり、佐賀藩と唐津藩にはそれぞれ大名が配置されていた。

一、佐賀藩の成立

1、龍造寺から鍋島へ

元龜元年（一五七〇）大友宗麟は今山の陣で大敗したので、大友氏の肥前遠征の野望は終わり、龍造寺氏の肥前における勢力は、この戦を契機として急速に高まり、戦勝のもとを作つた鍋島信昌（直茂）の武勇はますますたたえられた。龍造寺隆信は勢に乗つて肥前の国の群雄を次々に亡ぼし、ついに肥前、肥後、筑前、筑後、豊前に及ぶ国々と杵岐、対島の二島にも及んだので、当時隆信のことを「五州二島の太守」と呼んだといわれている。ところが、天正十二年（一五八四）三月隆信は島津家久の軍と島原に戦つて破れ、島原半島の神代で戦死したので、隆信の嫡子政家は鍋島直茂の補佐によって旧領地を保守することになった。このころ島津は次第に勢力を伸ばして



龍造寺隆信画像（高伝寺蔵）

北九州にも及び、豊後の大友氏と争い、天正十五年（一五八七）豊臣秀吉は島津征伐のため九州に攻め入つた。龍造寺氏を始め北九州、中九州の諸大名は秀吉に味方して島津を攻めたので、島津は敗退し島津義久は剃髪して秀吉に降伏した。

秀吉はこの戦の論功行賞として、龍造寺には東部肥前（佐賀地方）を与え、天正十八年（一五九〇）に政家の子高房に三十万九千九百石の朱印状を与えた。隆信の戦死以後龍造寺氏の勢力は著しく衰退した。これは隆信の嫡子政家が父に比